

まえがき

2018 年 12 月に前任の花岡文雄先生(現 国立遺伝学研究所 所長)から筑波大学生存ダイナミクス研究センター (Life Science Center for Survival Dynamics) のセンター長を引き継ぎました。

本センターは 1973 年のノーベル物理学賞受賞者である江崎玲於奈筑波大学学長(当時)の発案により、1994 年 5 月 20 日に筑波先端学際領域研究センター(Tsukuba Advanced Research Alliance Center; TARA センター)として発足しました。発足当初の理念は、筑波大学がいわゆる「象牙の塔」としての負の側面も持つ閉鎖的の大学から脱却し、筑波研究学園都市の利点を最大限活用した「産・官・学」の自然科学分野での研究協力体制を確立し推進することでした。

しかし、全国の大学に先駆けた当センター発足の理念は、昨今ではすでに多くの大学に波及しており、発足当初の先導的役割をほぼ達成したことから、2010 年 10 月 1 日に研究領域を自然科学全般から生命領域学際研究に特化した改組を行いました。さらに 2018 年 4 月 1 日からは「生存ダイナミクス研究センター」として生まれ変わりました。ただし本センターの略称はこれまで親しまれてきた「TARA センター」の名称を継続して使用しています。



持続発展に資する生命科学研究の推進

今回の改組の背景には、多くの生物種の全ゲノム情報(設計図の情報)が次々と解読され、膨大なゲノム情報の発現制御機構と生命現象との関連性が問われる時代になったことがあげられます。また社会が要請する「人類の調和のとれた持続的発展」に資するため、近年の進展が著しい生命科学研究の中でも特に生物の「動的生存戦略」を解明する基礎研究に焦点を絞り、生物が環境変動に適応するために潜在的に保持する生存戦略を明らかにしていきたいと考えています。

先端機器の共同利用も提供できる研究拠点の形成



生物の「動的生存戦略」を解明する基礎研究を推進するためには、次世代シーケンサー、質量分析、クライオ電子顕微鏡などの先端機器を駆使して生物が含む膨大なゲノム関連情報を網羅し、それらを的確に情報処理することで「動的生存戦略」の仕組みを明らかにすることが必須です。そこでこれらの先端機器を共同利用できる研究拠点を形成し、世界をリードする先端的基礎研究推進のため、将来的には大規模な国際共同研究を展開できる組織運営体制への発展も目指しています。

2019年10月吉日

国立大学法人筑波大学

生存ダイナミクス研究センター長 林 純一